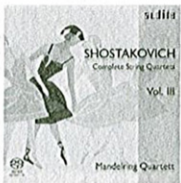


## ■増田良介 (インド古典文学)

マンデルリング四重奏団によるショスタコーヴィチ全集第3集は、最初と最後の夫人に献呈した2曲と、(一方的な?) 恋人だったウストヴォルスカヤの作品が引用される5番という組み合わせだ。これまでの2枚ではかなり激しい表現への志向が強かったこの団体だが、今回はむしろ、細部まで周到に仕上げられたバランスのよい演奏という印象を受けた。考えてみれば、2、3、8番などの叙事詩的な曲と、多分に私的なメッセージとしての性格を持つているであろうこれらの曲とで違う表現になるのは当然なのだが、控えめな愛の歌のような5番の第2楽章から、切り詰めた音たちの中に痛切な悲しみの通底する7番、そして人を食ったような9番のフィナーレまで、マンデルリング四重奏団が聞かせる多様な表現は実に見事なものだ。次回に予定されている後期作品集(10、12、14番)が楽しみになる。例によって録音は非常に優秀で、力強い低音も繊細な高音も生々しく迫力がある。

## Shostakovich



### ショスタコーヴィチ／弦楽四重奏曲全集第3集 (第5、7&9番)

マンデルリングSQ  
〈録音：2007年5月10～12日〉  
[Audite@AU 92528]  
(CD&SACD)